

## 大学で学ぶ意味を考える

森田 雅憲	同志社大学企画部長 同志社大学商学部教授
講師紹介【もりた・まさのり】	〔研究テーマ〕 制度と個人の作り作られる関係に注目して経済社会の原理を研究

## はじめに

ただいまご紹介いただきました、商学部の森田です。このスピリット・ウィークは、建学の精神や新島襄の思想を学生、教職員の皆さんにより深く知っていただくという趣旨でもたれています。したがって、私もそれに類するお話をすることが期待されているのですが、今日は、より一般的にまず「大学」という空間で学ぶことの意味のようなものを考えてみたいと思います。そして教養教育を学ぶ意味をとりあげ、最後に同志社の良心教育について触れてみたいと思います。

## さまざまな学生像

私が同志社大学に赴任したのは一九八〇年ですから、皆さんのほとんどがまだ生まれる前のことです。大学に入学した若者たちを二十年以上にも渡って見続けてきたのですが、今も昔も、受験勉強から解放され、一時的に方向喪失感にとらわれたり、大学の現実に失望して学ぶ意欲を失いかけたり、あるいはサークル活動の中に大学に来る意味を見出したりする点では、時代を超えて共通する現象がたくさんあります。それらは大人へのイニシエーションを受ける際の発熱現象だといえるものであり、私はある意味で正常なことだと思っています。しかしこの二十数年を通過してみると、若者たちの考え方や振舞い方が、私から見て少し問題ではないかと感じざるをえない方向に変わってきているように思います。それは、若い人たちの間で、目的手段的な考え方や振舞い方が年とともに傾向的に強くなってきているように思われることです。

大学にはいろいろな学生がいます。恋愛に憂き身を窶（やつ）す学生（ロマン派）、クラブ活動やアルバイトに明け暮れる学生（課外派）、文学や哲学に耽溺する学生（思索派）、とにかく一生懸命勉強する学生（勉強派）、ダブルスクールまでして資格試験に精を出す学生（実用派）、そして真面目に大学に来て講義には出席するが、勉強に身を入れるわけでもなく（講義に出てもらいたいメールを打っている）、何気なくキャンパスで時間を過ごして帰宅する学生（何気派）などなど。

ロマン派、課外派、思索派それに勉強派はわれわれの時代にも数多くいました。もっともわれわれの時代には、もうひとつ活動派というジャンルが幅をきかせていました。学生運動に明け暮れている学生ですね。ところが年々傾向的に多くなっているのは、実用派や何気派の学生です。資格を目指して一心不乱に勉強する学生の傍らで、大学での勉強に興味を見出せず、かといって他の活動に没頭するわけでもなく、なんとなく日々を過ごしていく学生のコントラストが目につくようになってきているのです。

たいへん雑な見方かもしれませんが、実用派と何気派の人たちは、彼らの表面的な違いとは対照的に、実は根の部分では、同じ考え方・生き方をしている人たちではないかと私は思っています。彼らに違いがあるとしたら、端的に、目的が見つけられたか、見つけられなかったかの違いに過ぎないのではないのでしょうか。学ぶ目的が見出せず、なんとなく日々を送っている人であっても、具体的な目標さえ定まれば、人が変わったように邁進できると思います。

すなわち、彼らは共に目的志向の人間であるということです。目的が与えられれば（あるいは見出せれば）、がむしゃらに前進できるが、目的が与えられなければ（あるいは見つけられなければ）、意欲を失ってしまう。根は同じというわけです。

年々、傾向的にこの種の学生生活を過ごす人が増えているように思います。たとえば私は経済学という人気のない科目を教えています。この科目は、およそ現実の経済とは似ても似つかぬ抽象モデルで、失業やインフレの問題を分析しているのですが、学生から「こんなことを勉強して、果たして何に役立つのですか？」という質問を受けることがあります。また「先生の経済学は、資格試験や公務員試験に役立ちますか？」というあけすけな質問も受けます。常に「何に役立つのか」ということが問われているのです。しかもその役立つ判断基準が、常に「自分にとって役立つかどうか」というところにあるのです。自分にとって役に立つかどうか、その科目を勉強するかどうかの動機付けの基準になっている場合が、目につくように感じます。

目的達成のための手段としての勉強という考えが身に染みついているのは、長い間の中等教育の弊害ではないでしょうか。「期末試験で良い成績をとるため」、「大学に合格するため」などなど、ゴールを与えてそれに到達する「ため」に勉強する、というスタイルをとり続けてきた結果だろうと思います。もちろん基礎学力をつける中学や高校ではそのような勉強スタイルは基本だと思われ、またそのような勉強方法が、個人の潜在能力をより引き出す効果をもっていることは、私も否定しません。しかし、大学でも同じスタンスで勉強に取り組むと、大学のもっとも大学らしい教育を受けるチャンスを逃してしまうことになりかねません。大学では大学にふさわしい学びの姿勢があると思います。

以下私の研究テーマに関連させながら、このテーマを掘り下げていこうと思います。

## 認知や行為のルール

私の研究テーマは、フリードリヒ・アウグスト・フォン・ハイエクという学者の社会理論を講解することです。ハイエクという人は一応経済学者に分類されており、一八九九年にオーストリアで生まれ一九九二年に亡くなりました。彼が経済学者として世に打って出ようとしたまさに同じ時期に、ジョン・メイナード・ケインズという二〇世紀を代表する経済学者が経済学上の一大革命を起こしつつあり、その陰に隠れただけでなく、彼の論争で「敗者」と見なされたために、ハイエクは経済学者としては不遇でした（それでもノーベル経済学賞を受賞していますから、天才と呼ぶにふさわしい人です）。しかし、ハイエクのすごさは、ノーベル賞にたがった彼の経済学にあるわけではありません。彼は四十歳になるころまでには経済学を見限って、晩年にいたるまで社会理論の研究に没頭しました。その過程で生み出された壮大な社会理論が切り開いた地平こそ、彼を二〇世紀最大の社会学者の一人とするにふさわしい業績なのです。

さて彼の研究は、経済学はもちろん、理論心理学、言語学、法学、政治学、動物行動学、サイバネティクス、自己組織化論、進化論などなど、さまざまな分野をカバーしています。そしてそれらを総合して、「大きな社会（1）」における人為的支配の及ばない秩序形成の仕組みを彼は研究しました。ここでその全容を解説している時間的余裕はありません。またそれがこの講演の目的でもありません。以下では、彼の知識論・行為論を、本日の講演テーマとの関連でご紹介し、それを糸口として本日のテーマにせまりたいと思います。

私たちは、誰でも一定のルールに従って行動していますね。言葉が話すときには意識の俎上には上りませんが、文法というルールに従っているし、また自動車で道路を走る時は、左側通行というルールを守ります。しかしここでは、ルールという言葉は、単にそうした行動面の規則性だけでなく、認知の規則性という意味でも使うことにします。認知のルールというのは、たとえば、ある食べ物を食べて、「まずい」とか「うまい」と判断したり、あるいは「大」という字と「犬」という字の違いを識別したりする際の基準のようなものだと考えてください。

ハイエクは、こうしたルールを、その成り立ちから三層の階層構造を持つものと捉えていました。最基底にある層は、遺伝的に受け継いだ本能的動因、つまり種としての学習の産物としてのルールです。熱いモノに触れば、おもしろい手を引っ込めますね。生まれたばかりの赤ちゃんは、教えなくても母乳の出る場所を探し当てますね。そうした行動はすべてDNAに書き込まれたルールに従っています。そうした生まれつき持っているルールの上に、伝統や慣習あるいは文化といった後天的学習によるルールからなる層が形成されます。この層は、個体・個人の学習の結果として獲得された行為や認識のパターンですが、それはさらに無意識レベルのもの意識的レベルのものに二分されます。たとえば無意識レベルのものとしては、母語の文法やM・ボランニーが「暗黙知」と呼んだたぐいの行為・認識のパターンが含まれます。

意識的な部分とは、たとえば長年の慣行が法律家によって発見され言語表現を与えられたものとしてのコモン・ローが位置づけられます。ハイエクはこれを「ノモス」と呼んでいます。そして最も上層にあるのが、「既知の目的に資するために計画的に採用あるいは修正される薄い層（2）」、つまり合理的反省的意識が生み出す行為規範であり、「ノモス」に対比させそれを「テシス」と呼びます。ノモスは下図における「言表可能なルール」に対応します。またテシスは最上部の「設計的ルール」に対応しています。

図で示したように、言語的/非言語的の区別は、意識的/無意識的の区別と対応していません。図で影を付けた部分のように、言語で表現しえないが、しかし意識されうる行為ルールの範疇が存在するのです。たとえば、われわれは何が正義かを語れといわれれば、答えに窮しますが、誰かの行為を見て、「それは間違っている！」と即座に判断できることが多いですね。このような判断基準は、この領域に含まれるルールということができると思います。また自転車に乗る技術はその練習を意識的に行わない限り身に付きませんが、乗れるようになったからといって、どうしたら乗れるのかを他人に言葉で説明することはできません。知っているということと、言葉に表すことができるということとの間には、大きな違いがあるのです。

言葉で表現できない、ということはマイナスではありません。いやむしろ、言葉にできないからこそ担える大きな役割があるのです。言葉によって行為の根拠付けを行おうとすると無限遡行に陥ることはよく知られた話ですが、そうした遡行をくい止め、われわれの行為や判断に根拠らしきものを与えてくれる部分が、実は、この領域に分類されるルールなので

す。というのも、この層のルールは、言語による反省的意識のチェックが及ばない世界だから、その正当性を吟味しようがないからです。

このように、われわれの内部にある行為や認知のルールはいくつかの層に分かれているのですが、注目すべき点は、それらが鏡餅のような構造を形成していて、より下位の層にあるルールが、より上位の層にあるルールに対して、土台の役割を果たしている点にあることです。これはいくら強調しても強調しすぎることはないくらい重要なことです。つまり私たちの認知や行為のルールは、最終的には意識することもできないし、語ることもできないものに支えられているということです。誇張して言えば、哲学者が、「いったい世界は存在するのか」と考えあぐねている時も、存在に対する彼または彼女の懐疑の念にはおかまいなしに、肉体は黙々と呼吸を続け、せつせと脳に血液を送り、懐疑論者の思考をすら支えているのです。だからこそ論理の世界で発生する「ミュンヒハウゼンのトリレンマ（3）」は、この生きられる世界では問題とはならないのです。

ところでハイエクは、これらの層を大きく二分しています。それは最上層の「設計的なルール」とそれ以外のルールです。前者は、理性的な産物、言い換えれば人為的に形成されたものであり、後者は自発的spontaneouslyに形成されたものです。たとえば狭義の実定法のかなりの部分が前者に対応します。ただし慣行的に実施されていたルールを明文化した慣習法は、自発的なものです。一国経済を一部の人が計画的に管理運営しようとしたら、それも前者に入ります。またエスペラントを除けば、われわれが話している母語は、後者ですね。自発的に出来上がったルールです。ハイエクの一番の功績がどこにあるかは、意見の分かれるところですが、多くのハイエク研究者は、社会秩序を理論化する際に、この自発的なルールの重要性を強調したところにあると考えています。私もそれは正しいハイエク理解だと思えます。

さて、われわれは知識といえば、学校で教わるもの、あるいは書物から学び取るもの、と普通は考えていますね。とにかく言語を使って意識的に行う営為だと考えています。それに相当するものは、この図ではもっとも上位にある層になることはいまでもありません。ところがハイエクは語り得ないし、また人為的にもコントロールできない自発的なルールをもっとも重視したのです。その部分を学校教育によって育むことはできないのでしょうか。もしできないのだとしたら、人間の認知や行為にとってもっとも重要な部分が、人間の意志の関与を許さないところで形成されることになり、なにか暗然たる気分になります。しかし、私はその層に対しては、人間のコントロールは及ばないものの、一定の間接的誘導はできると考えています。実は、それが教養の果たす奥深い役割ではないかと思えます。

## 見えない自分

さて、ハイエクの話はこれぐらいにして、本題に戻りますと、われわれの認知や行為のルールの根源にあたる部分は、人為的・意識的に獲得されたものというより、いつのほどにか出来上がったものだと述べました。DNAにすでに書き込まれている部分はさておき、生まれてから現在までの、親から授かった価値観や美意識、テレビやゲーム、兄弟や友達との交わり、学校での教育などなど、生きられたさまざまな経験が、おのずとそうした部分を形成してきたのです。それが土台にあって、その上に反省的な意識が乗っかっているのです。

ところで、だれでも自己の真の姿を知りたいと思っているのではないのでしょうか。「自分とは一体誰なのか」、「自分が本当に望んでいるものは何か」などなど、特に思春期にはこうした問題は、精神生活の上で大きなウェイトを占めています。時に自分が何のために生きているのか分からなくなるのは、自分たちを形成している圧倒的部分が、自分の意志とは関わりなく自発的に形成されてきたものであって、その全貌を言語で語ることもできない性質のものだからです。このようなある意味で「未知の」ものに支えられて、私たちは生きているのです。

さて、ここで先ほどの実用派の大学生活の過ごし方に戻ろうと思います。私は、大学に入って、すぐさま自分の将来のために、資格試験突破を目指して脇目もふらずに勉強することは、決して悪いことではないけれど、多少の注意が必要だと思っています。「自分の将来の生活のために」というのが勉強の動機の主要なものだと思いますが、その「自分」は、自分の意志とは関係なく自ずから形成されたものに支えられた、いわば「あてがいがちの自分」だからです。言い換えれば、そのような「自分」は半製品であって、そのような自分を客体視するもう一つの自分、あるいは眼差しを持つようになって初めて一人前の「自分」だといえるのではないのでしょうか。ですから、ただか十八年ぐらいの人生経験が作り上げたものを相対化することなく、自分の将来に真に役立つことなど分かるはずはありません。そもそも自分自身が未完成なものですから、その自分を与件として、この先五十年は続くかという長い人生の進路を決定してしまうことには、十分注意を払う必要があります。仮に受験するとしても、少なくとも、そうした営為と並行して未知なる自己との対話を怠らないことが不可欠だと思います。

「これからは、競争の時代だ。実力のある個人が評価される。そのような時代の中で水準以上の生活をしようとするれば、他人との差別化が必要だ。それには難関の資格をとっておくことが有効だ」などと考えてみたところで、それらはすべて反省的意識の及ぶ最上層での論理であって、こうした考えを無意識のうちに産出し、一定の方向へと誘導している未知なる自己への眼差しがそこには希薄です。

問題は、反省的意識の及ばない、そうした自発的に形成された自分が、「正しい」自分であるとは限らないということです。ひょっとしてきわめて重要な人間の資質を欠いたままであるかもしれません。自分の目の色を自分で確かめることができないのと同様、その欠けた部分を自分で直接認識することなどできません。欠落している部分が、人間社会の一員となる上で決定的に重要なものである場合は、深刻な問題をはらみます。しばしば見られる若年層のとんでもない犯罪の原因がここにあるのではないかと思います。重大な罪であるにもかかわらず、自分のしたことの意味さえも分からない。まさに自分に欠落しているものが見えていないのです。しかしそれは彼らだけの問題ではなく、人は皆、自分を支えている見えざる自分が何か欠けているかなど分かりはしないのです。

## なぜ教養か

さて、何が欠けているかということ自分が自分では分からないものに自分は支えられているとしたら、どうしたら、その欠落を補完することができるのでしょうか。反省的意識の及ぶ層であれば、書物や講義を通じて、論理や知識としてそれらを吸収していくことで、それが達成されるかもしれません。しかし、反省的意識の及ばない部分については、そのような方法はあまり効果があるとは言えません。たいていは多くの他者との交わりの中から平均像のようなもの、あるいは常識的な価値観を体得していくのですが、そうかといって、さまざまな経験を積んで自ずと、その部分を補完することには限度があります。われわれに生きることを許された時間は短く、とても必要十分な量や質をとまなう経験をしているわけにはいかないからです。たとえいろいろ経験したとしても、それが望ましい自分を形成してくれるとは限りません。また、欠損のない存在になることが果たして良いことかどうか分かりません。何が欠落しているのかについて客観的な尺度などないからです。何がこの未知なる自分を磨いてくれるのでしょうか。

私は、教養教育の重要な役割が、実はこの部分の陶冶にあると考えています。教養のない人ほど教養の重要性について語る傾向があるといわれますが、これは私に関する限りでは真理です。ですから教養という言葉あまり使いたくないのですが、とりあえず他に適当な言葉がありませんので、あつかましくもこの言葉を使うことにします。

ところで教養教育とは、文学が描き出す奥深い人間像、哲学の透徹した人間理解、さまざまな芸術が揺り起こす深遠な感動、身体の動きを通じて学ぶヒトの体の神秘、観察や実験を通じてかいま見る自然界の美しさ、心の琴線に触れる語り、などなど、感性に直接働きかけるこうした「佳きもの」に晒されることが反省的理性的な及ばない自分を、自ずと磨いてくれるのだと思っています。私の好きな言葉で言えば、佳きものによる「燻習（くんじゅう）」（4）ということになります。それは決してアチーブメント・テストのように正解があって、そこに達しているかどうかで判定できるようなものではありませんし、終わりのあるものでもありません。そうしたものにただただふんだんに晒（さら）され続けることが大切なのではないでしょうか。

ここで注意していただきたいのは、教養至上主義を唱えているのではないということです。教養至上主義は、教養を豊かに持っていることを重視しますが、教養のあること自体が重要だとするだけでは、経済的に恵まれること自体が重要だなどと考えているのとさほど違いはないからです。大切なことは、佳きものに晒されることで自ずから燻習される「よりよき」自分の存在なのです。よりよき自分は作ろうとして作れるものではありません。自ずと育つのを待つしかありませんし、これで育ったということが分かるわけでもありません。

大学で教養教育が重視されるのは、それによって反省的意識が及ぶ薄い層だけに限らず、もっと奥深いところまで陶冶しようと考えているからです。専門分野の知識でもその効果はありますが、それは間接的なものにすぎません。専門教育は、その分野のエキスパートになるために反省的レベルの知識を鍛え上げることを第一の目的にしているからです。しかし教養教育はそうではありません。教養教育は、言語知の及ばない知の世界（「感性」といってもよいかもしれません）を磨き上げることを第一に狙っています。それはより深い意味での人間教育の営為であって、それを通して普遍への気づき（すなわち他者理解）への道を開くこと、それこそが、大学という教育機関が担っているもっとも重要な使命の一つだと私は確信しています。その機会をないがしろにすると、大学で学ぶ意味が半減してしまいます。

ご存知の通り、同志社は、創立以来、良心の全身にあふれる人間を育むことを教育目標にしてきました。これは同志社が江湖に誇りうるすばらしい教育理念です。しかし現実には良心教育など形だけのお題目に過ぎないと思っている人の数は決して少なくないと思います。それはとても残念なことです。そこで最後に、この点について、今日お話ししたことに結びつけて触れてみたいと思います。

同志社大学の正面に鎮座している良心碑には、「良心とは何か」ということが一言も述べられていません。良心が何であるかを語らないのに、良心教育などできるか、と思われる人も多いのではないかと思います。かつて私もそのような一人でした。マルクスが言った言葉をもじれば「地獄への道は良心で踏み固められている」のかもしれないのです。しかし、今日お話ししてきたことから類推していただけるように、良心もまた、語り得ない知であり、自ずから個々人の内に燻習されていくものなのです。良心的な行為は言葉で表すことはできません、良心そのものを言葉で表し、なおそれを何かの基準で根拠づけることなどできません。同志社大学は良心を育むゆりかごに過ぎません。その中で燻習されることで、いつか、人生の大きなクロスロードにさしかかった時、「良心の全身に充滿したる…」という新島の言葉が自ずと心に浮かぶようになってほしい。そしてその時には、自分が良心だと信じられるものに従えばよい、というのが新島のメッセージだと思います。同志社の自由主義教育は、良心がいわば自発的に育つことを目指すものであり、決して指導や強制によって達成されるものではないという思想に裏付けられているのだと、私なりに解釈しています。そしてこのような一教員の勝手な解釈でさえ許してくれる、そのような根源的な自由が、このキャンパスには横溢していると思っています。

ご清聴、ありがとうございました。

- 1 Great Societyの訳語。しばしば「偉大な社会」と訳されるが、人口規模が大きく、人々は社会の構成員のごく一部としか顔見知りでないような大きな社会のこと。
- 2 Hayek, F. A [1979], Law, Legislation and Liberty, vol. III: The Political Order of a Free People, Routledge & Kegan Paul, pp. 159 - 160 (渡辺茂訳『法と立法と自由 III 自由人の政治的秩序』ハイエク全集、第十巻、春秋社、一九八八年、二二一頁)
- 3 命題の根拠を論理で正当化していくと、根拠の根拠を求めて無限遡行に陥るか、複数の根拠どうしがお互いを根拠づけているという循環論法に陥るか、あるいは根拠を求めるという行為そのものを独断的に停止するか、そのいずれかしかない、という主張。
- 4 唯識仏教の用語。日々の行いの積み重ねが人格を練り上げるという意味。「薫習」とも書く。

二〇〇五年十一月八日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録

(図・写真につきましてはHPでは省略しております。)